



人とき合う法・河盛好



蔵好盛河・法合つきと人

人とつき合う法

昭和33年10月30日 発行
昭和34年1月15日 5刷

© 著 者 河 盛 好 藏

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 新 潮 社
東京都新宿区矢来町71
電話 (34) 7111~9
振替東京 808番

¥ 200

印刷・東光印刷株式会社 製本・新宿 加藤製本所

目次

イヤなやつ	七
秀才氣質	三
つき合いのいい人	七
名もない虫	三
割勘について	三
悪口について	三
物くるる友	三
他人の秘密	三
話題について	三
酒の飲みかた	三
時間を守ること	三
言葉づかい	三

二人の友……………	三
中身と額縁……………	三
古い友、新しい友……………	七
礼儀について……………	三
虫のいどころ……………	六
おせじについて……………	七
父親とのつき合い……………	七
師弟のつき合い……………	一〇
兄弟のつき合い……………	一〇
親友について……………	一三
ライヴァルについて……………	一七
友達のできない人……………	二三
よき隣人……………	二七
母親について……………	二三
ガールフレンド……………	三〇

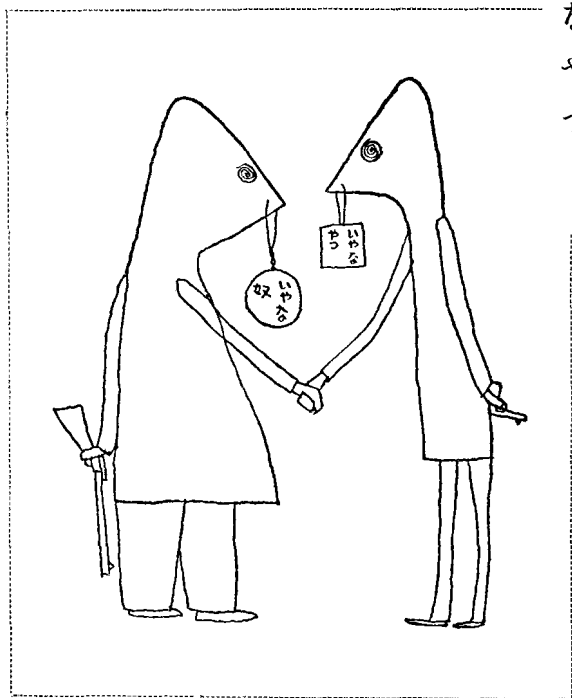
遠来の客……………	一四
金銭について……………	一五
旅の道づれ……………	一五
悪友に手を出すな……………	一五
約束について……………	一五
エスプリとユーモア……………	一六
喧嘩について……………	一七
紙上でのつき合い……………	一七
あとがき……………	一八

装幀・挿絵

花
森
安
治

人
と
つ
き
合
う
法

1
イヤなやつ



鵬外と漱石

人とき合う法についておしゃべりをするに当って、まず「イヤなやつ」から始めるのは、多少の理由がある。いうまでもないことだが、「イヤなやつ」という言葉は、決してひとをほめた言葉ではない。われわれが、なるべく人づき合いをよくしようと努力するのは、他人から「イヤなやつ」といわれたくないからである。しかし、世のなかで、多少とも頭角を現わしている人間で、「イヤなやつ」と批評されなかった人がかつてあったろうか。

文壇とか芸能界は昔からひとの口のうるさいところであるが、森鵬外が死んだとき、雑誌『新潮』の主幹中村武羅夫は、次のような記事をかけた。「生前イヤな奴だと思って居ても死後その人の逸話や私生活を知ると何となく好きになつて来る人がある。ちょっとした逸話にその人の人間らしい面目が見えて、生前の反感が打消されて了うような人がある。原敬だの山県有朋だの出羽の海だのは、生前イヤであつたが、死んでから割合に好感を持てた。ところが生前もイヤな奴で死後も尙イヤな奴がある。大隈だの森鵬外だのがそれだ。彼等の死後業々しく報道される彼等の人となりを知れば知るほど、一層親しみが持てない」云々。これに対して、永井荷風がきびしく抗議したことは、文壇史の有名な一ページとなっている。

鵬外と並び称された夏目漱石についても、名作『黒髪』の作者近松秋江が、「僕は暗に世をすねとるやうなあのポーズがどうも気に入らない。あすこにどうも嘘があると思ふです。西園寺公の清談会へ出席しなかつたりね。博士をことわつたりね。どうもありや肩唾ものだな」といつて散々にこきおろす話が、長田幹彦著『文豪の素顔』のなかに出てくる。

い 喬木に風が強 そういう近松秋江が、彼の家で一週間ばかり女中をした林芙美子に、イヤなひととして『放浪記』のなかに書かれているのは面白い。文学者というものは人

一倍感情的で、嫉妬心が強く、好ききらいが烈しいから、普通の社会では立派な紳士として通っている人に対しても、イヤなやつとか、虫が好かないとかいって、悪口を言うのであろう。しかし鷗外や漱石の文学が、いかなる人物評にもびくともしないので、高くそびえていることは、あらためていうまでもあるまい。

「喬木に風が強い」といわれるように、人間は名声を得てくれば、得てくるほど、世間の風あたりの強いことは、あらゆる社会において共通のことである。「イヤなやつ」といわれることを気にしては、生きてゆくことも、自分の志をとげることもできない。「フランスの大政治家ブリヤンは、世評というものを全く気にかけず、彼を攻撃した新聞などは少しも読まないで、いつも「自分にとって大切なことは、他人が自分のことをどう考えているかということではなく、自分が奴らのことをどう考えているかということだ」と豪語していたという。社会と接触の多い仕事をしている人は、多かれ少なかれブリヤンのような度胸をもっていなければ、世のなかをしのいでゆくことはできない。

私が「イヤなやつ」について論じようとするのも、ひたすらに「イヤなやつ」といわれない方法について考えようというのではない。われわれは、いくら、人から好かれようと努力しても、すべての人から好かれるわけには決してゆかない。それは、われわれがあらゆる人を、分けへだてなく愛しようとしても、絶対にそうはゆかないのと同じである。そんなことは仏陀やキリストでなければできない。われわれは人間であるかぎり、特別に好きな人や、どうしても好きになれない人ができてくるのは当然である。大切なことは、自分の好きな人が、すぐれた人、立派な人であることであらう。

いや、しかし、これもまた、いちがいにそうとは言ひ切れないところがある。いくらすぐれた人、立派な人でも、好きになれない人、親しみのもてない人がいるものだ。私個人についていえば、同じく偉い人であっても、漱石には私淑する気持はあるが、鷗外には親しみを感じることが少ない。

くり返していえば、われわれはすべての人を愛することも、すべての人から愛されることもできない。しかし社会生活においては、自分の気に入った人間だけとつき合うこともできないければ、自分を好まない、自分を「イヤなやつ」と考えている人間に、つき合ってもらわなければならぬ。いやあ、たびたび出来てくる。いやむしろ、そういうばあいのほうが多いであろう。人と付き合う法について工夫をしなければならぬのはまさにそのようなばあいである。お互に親愛の情を感じ合える人間同士のあいだには、交際術の必要はないのである。

河盛好藏とい　そこで、再び、ふり出しに戻るのであるが、他人から「イヤなやつ」と思われ
う男　ないようにするには、どうしたらいいのであろうか。それよりも「イヤなやつ」とは、一般的にいつて、どのような人間を指すのであろうか。それにはまず諸君の周囲を見

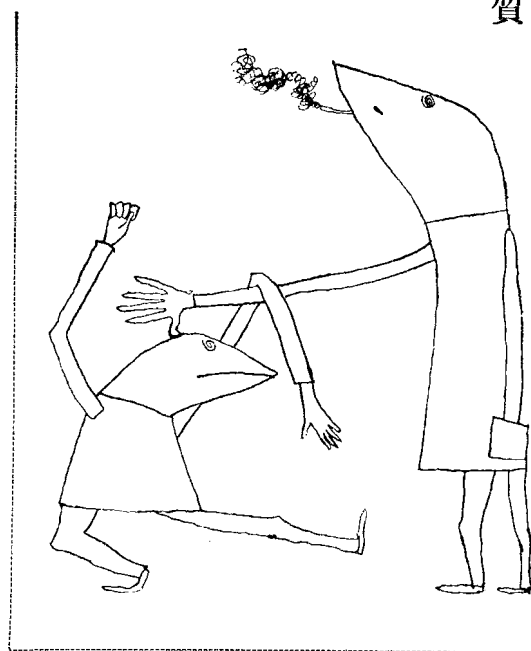
まわすだけで十分である。もしくは諸君自身のことを考えてみるのが近道であるかもしれない。自分は人に好かれていであろうか、それともいやがられているのであろうか、と自問自答するのである。

私自身のことを考えてみると、私はまず人に快感を与える容貌の持主ではない。性質についていえば、他人の幸福よりも不幸を喜ぶ根性の悪さがある。自分ではできるだけ怠けて、人を働かせ、その功を自分だけでひとり占めしたいというズルさと、欲の深さがある。権力者にはなるべ

く逆らわないで、時としては進んでその権力に媚びようとするいやしきがある。絶えず世のなかの動きを眺めていて、できるだけバスに乗りおくれまいとする、こすつからいところがある。他人にはきびしくて、自分には寛大な、エゴイストの部分が非常に多い。ケチで、勘定高く、他人の不幸にはそ知らぬ顔をし、自分の不幸は十倍ぐらい誇張して、いつも不平不満でいる。考えてみると、「イヤなやつ」の条件をことごとく具えている。

そして、こんなことを、あけすけに書いた方が、かえって得になるとひそかに計算しているのであるから、われながら憂鬱である。そうして私のような人間に限って、人に好ききらいが多く、自分に圧迫感を与えるような人間を見ると、すぐに「イヤなやつ」呼ばわりをするのである。しかし居直って言わせてもらえば、たいいてい人間はみなそれぞれイヤな部分を具えているのではないか。人間的なというのは、イヤなやつだというのと同意義語であるかもしれないのだ。そして、このイヤな部分によって、お互に反発すると同時に、お互に愛し合うばあいも少なくないのである。人間の長所美点は、ふしぎにその短所欠点と結びついている。どこから見ても、非の打ちどころのない人間などというものは、私などから見ると、ほとんど魅力がない。そういう人間は、ある意味からすると、「イヤなやつ」ともいえるのである。こちらのひがみであるかもしれない。それはともかく、人ときき合う法は、この自他のうちにある「イヤなやつ」の処理から始めなくてはならない。

2
秀才氣質



いつか文芸春秋新社主催の文士劇で、宮本武蔵に扮^かして名演技を見せた石川達三君は、芝居が終ってから、「武蔵という男は実にイヤなやつだよ、あんな男は友達にしたくないよ」と言っていた。そのわけをきくと、「あまりにも合理主義的だ」というのであるが、石川君はさらにつけ加えて、「トルストイの言葉に、生れてから一度も病氣にかかったことのない男は友人にするな、というのがあるだろう。つまり武蔵というのはそんな男なんだ」と教えてくれた。それをきいて、なるほどと私にも理解のできる氣持がした。

つき合いにく 「われ事において後悔せず」というのは武蔵の座右の銘であったと聞いている人

が、一生涯後悔したことのないような正しい人、強い人は、たしかにつき合にくい存在にちがいない。そういう人は、どんなに思いやりがあっても、結局、弱い人間の本当の悲しさを理解することができないのだ。

「生れてから病氣にかかったことのないような」健康無比な人間に、病人に対することまかい思いやりがないのと同じである。『徒然草』の作者も、「友とするにわろき者」のなかに「病なく身つよき人」をあげている。

無病強健の人に対して病身の人間が反感を抱くのは、いうまでもなくその人間のひがみである。いくらひがまれても、こちらは同情して病氣になるわけにはゆかない。頭脳や才能についても同じことが言えよう。あいつは頭がよすぎると悪口を言われても、持って生れた優秀な頭脳を、わざわざ悪くすることはできない。普通の人間なら一時間かかっても十分に飲みこめないことを、わずか五分で理解できたからといって、反感をもたれてはたまらない。

しかし同じく秀才と呼ばれる人間のなかにも、凡人に尊敬され、彼らを推服させる秀才と、反

感だけしか呼び起さない秀才とがある。いわゆる人徳のある人と、ない人との区別であるが、それについては、現代フランスの小説家ジャック・ド・ラクルテルの『シルベルマン』という小説が多くの教訓を与えてくれる。この小説は『反逆児』という標題で、青柳瑞穂君の邦訳が「新潮文庫」で出ている。

ここにシルベルマンと呼ばれるユダヤ人の秀才学生がいる。彼は日本流にいえば、高校の二年生である。よその高校から転学してきたのであるが、入学早々から嶄然頭角をあらわした。まず英語の会話の時間に、彼は活発に手をあげて、何度となく発言を求め、クラス中のだれよりもはるかに楽々と英語をしゃべった。そしてほかの連中などはまるで眼中にないような態度だった。休み時間になっても、彼は決して仲間と遊ばず、何かの競技が始まって、もしらぬ顔をしている。そのくせ、何かごたごたが持ち上がると、目ざとくそれを見つけて、すぐそばにやってきて、しきりに自分の意見をはきたがる。

自尊心

教室では彼は教師のお相手になることばかり考えて、しばしば教壇に近づいて、先生に取入るような様子をする。仲間のうわさが出ると、彼は低能でとおっている二、三の者を愚弄したり、面白おかしく彼らの真似をしてみせたりする。しかし成績は拔群で、作文の時間にすでに二度も一番をとった。そのために、これまでの優等生の仲間には嫉妬を起させるようになった。一方、怠け坊主たちからお祝いを言われても、ふふんと鼻であしらうような態度を示すので、優等生以外の階級からも怨を買わないではいられなかった。のみならず、彼は立派な成績にもかかわらず、先生たちからも好かれなかった。ある日、一人の先生のごときは、彼があまりしげしげと教壇のところにやってくるのをうるさがり、みんなにも聞えるほど荒々し